

「患者宅に猫育たず」

ニヤンと不思議な水俣の奇病

細川院長、注目の発表

言語、運動、視聴などにも障害をおこす恐ろしい奇病が水俣地方に発生、現地の対策委員会ではいま全力をあげて原因究明に当たっているが、当初からこれにタッチして

きた新日窒水俣病院の細川院長は十三日午後二時から熊大付属病院新講堂で開かれた第七十二回熊本医学会で奇病発生らしいの経過を次のように報告した。

それによると奇病は二十九年四月ごろから散発的に始まり、今年は早くも二十六件。

発病は徐々に最低二週間から三カ月を要し、発熱などの一般症

状がなくて急に手足がしびれたり、物が見えなくなったりするほか視聴覚が衰え、ふるえがきて、食物がとれず、ひどいものは精神異常を来す。そして肺炎、脳膜炎などの合併症を起し四十五例中十四例が死亡、死亡んでいることが判り、奇病が猫となんらかの関係があるのではないかという見解がのべられ注目をひいた。